義仲勲功図會

九

遠
2508
10-9

遠
2508
10-9

木曾義仲勲功圖會後編卷之四

北軍洛中狼藉條

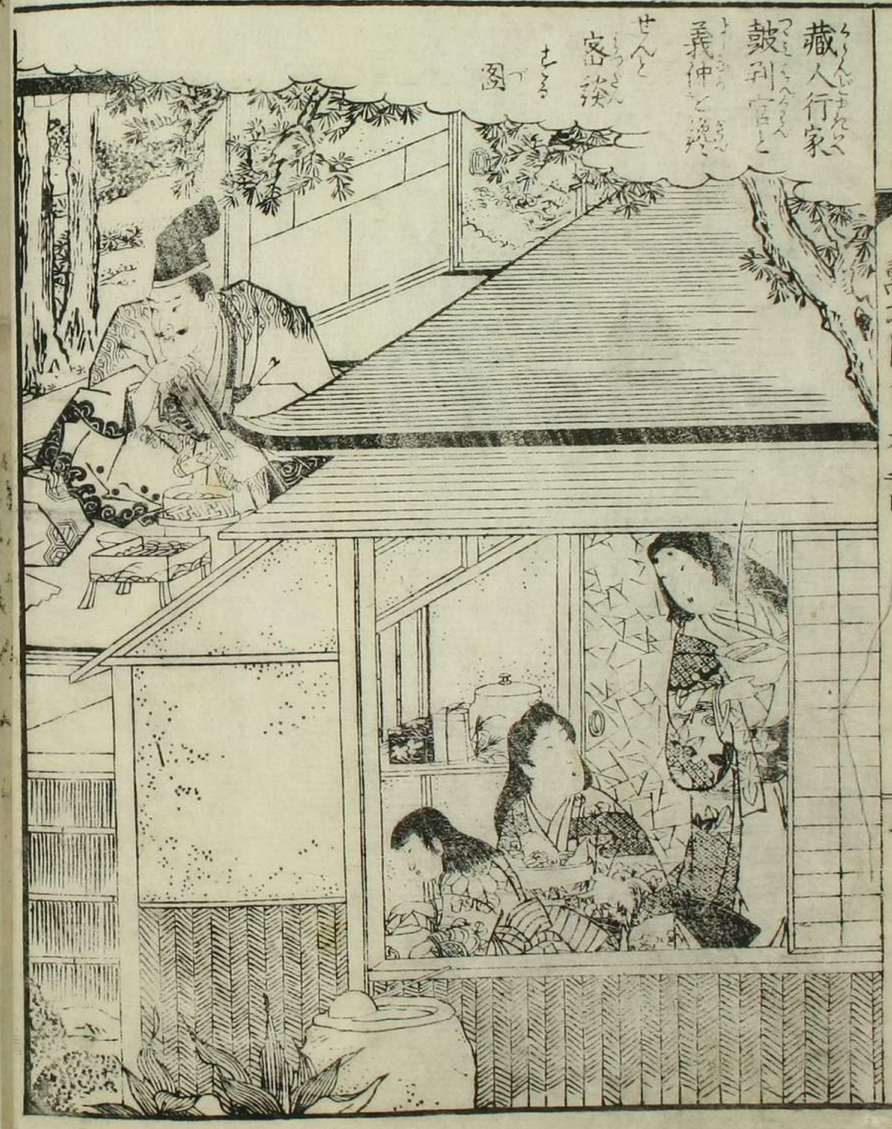
浪速　山珪士信考訂

去程ふ木曾殿ハ樋口ろ従進ふ於ろ必勝の鋒先を弛都へ引反さる其間ハ草く都へ寄えれど洛中洛外の人民大ふ驚ろ木曾殿平家を征伐せごて手途より引反さるハ奈何なる吏おやと安心ハなりろ。十郎行家ハ院糸して奏ーろハ義仲西國へ下向ーおぐ半途より引反ーハ弥平家と合躰仕るふ疑なくハ。此上ハ某一手の勢を以て弛下し平家を追討仕ハんとヤれハ院も尭るべーと勅行ある。行家畏り手一千余騎ゆて播列へ弛下る。是ハ行家ろ深き巧なり。其故ハ已飽まぐ義仲を疑ーれど。木曾都ふ上り自然絶妻の吏露顕せと身の大事なり。且木曾平途より引反せーと宣ふと平家気を弛ん油断ーて在ん其不意を伐く自己の武功を顕さんと好智を図て斯ろりる なり。木曾殿ハ探ふとんで都へ凱陣あ。樋口等ふ對面ー委曲を宣紙ーるひ

偖関東の動静を窺合さるゝに或る頼朝黄瀬川へ出張をゝもひ。いまだ
出陣なゝもいの更に実否分れ大いに後悔あり。是皆讒者の流言して
人心を迷さこのゝごとし。悪八伯叔行家こゝ年来の好意をも不顧ゞして
遽ゝ軍を反さ已に引違て西國へ下るハ我功を奪ん坊を二つに我
に面を合さじ讒奏の罪を責られん吏を恐る故なり。所詮此上院参して
讒者を賜らんと。十分憤怒の懐胸に満て毫下の勇士數十人を率具し
て院参ある。法皇義仲が院参をゝと聞召驚らせ給ひ。御不例と称して
引籠らせ給ふ。本曽殿八階下に蹲居奉候の旨を通じ給ふ。静賢法印参
上出て對面申さるハ。法皇に両三日以前より御不豫にて引籠らせ給ふ例
某に貴將の口上承まゝの院命なり。先法皇の御意に義仲戦功を厭ず
平家追討の為西國へ下る条神妙に思召さ。早く勝軍を報じ神器を還
御なゝまゝと樂を待ゝ処に其義なく半途より引返せハ如何なる子細

詳に申さゝるゝの御変なりと相演る。本曽殿静賢が面を眺て見上て仰ゝる。
義仲苟も高倉宮の令旨を戴しより以来九夏の天も甲冑を解ず冬の
夜も郊野に明て。嶋る平家を追落し法皇の睿慮を安んじ奉る。其を
聊か御憐なく。北陸宮を帝位に進めゝ剰さへ洛中の物價を上させ義
仲の兵勢を減じ。是皆讒奏の致す処とゝ。君御許容あるハ左右に某
を悪ませ給ふ故なり。然まゝ臣として君を恐ざるべからゝ。猶身の
不肖を責て平家の根葉を断て西國へ下向仕ふ。猶讒者の言を納て鎌倉の
頼朝に義仲追討の院宣を賜り関東勢を召上る者ゞ其前に平家の
大敵を清後に頼朝の猛軍を置進退俱に路なく前後顧る遑あらざ所
詮君に悪まれ死ぬべき身にて候。都城に鎌倉勢を引受潔く戦死
仕ん為に半途より引返しに即今院参仕るも最期の際に今一度龍顔を
拝し。且ハ讒者の名を承り遺恨を晴いんとの御不例と申ゝ

絶方なし。速ふ幾者の名を仰度ものと。憤怒の気色面ふ溢れ切るや
されば。諸賢大ふ怖れ。慥奏問いでゝ立入再度立出ずるハ奏問の趣
詳ふ達せし処院殊ふ叡慮思召給ふハ帝位の吏ハ公卿詮議の上皇太
神宮の御告ふ任せし処なれば。扨ひならざる吏先達ても通りなり
ね洛中物價の吏も引下げよ。觸渡さむといへども。今諸道兵乱ふて諸国の通
路絶えれば自然ふ勇物乏く價の倍もる吏時世の不肖ふて力及ず
況ンや知ぬふあらぬ。又頼朝へ追紛の宣旨を下せし吏ハ跡方なく安統之
當世のなるい種々の雑統雑となく言觸し。院中へも種々の吏歩ふ信
用もる吏なし。然れど維を幾者と名を指ぬ。只雑人の中言なるべれば遺恨
狭まじ。倍忠戦を励。頼朝と心を合し治國平天下の功を逐俱ふ源氏の家
を量いてこの紹ふいと演舌し。水曽殿紹を求て院の綸者をもだひふを深く
恨とおくとも奉方なく。最不興気ふて退出有るゝ是より快々として楽
ぬ法令自然弛るゝふぞ。末々の雑人歩奉等諸品の貴ふ困る稍もれば咀
嚼口論し中ふハ諸品を理なく奪掠る者も有り然れども其組頭の者も院中
より仰出されて物價の貴くなるゝと歩上を恐る居れば只不知負ふ捨置ふ
弁ふ雑人ども無吏ふ市中を徘徊し。我も〻と市中を徘徊し。今ぞ貴く債らきし
反報ふとぶふ欲る物を引奪の取掠る。是ふ依市街商賈ハ困窮大方なるべ
果ち店成下し戸を鎖て諸品成交易者なれば雑兵ども道行者の衣服を
剥手ふ持肩ふ擔る物を奪ハ甚ふ紀ハ門戸を確く押入奪ふ。あれば妻子を
貨ふとして債もあり。城ふ洛中ふ物騒ふ絶なく泣叫声行徳ふ喧しし。今井
樋口の徒是成人ふ。是ハ余りの狼藉ふ斯てハ洛中ふ住居する者なく公用ふ
吏欠ふ。又幾佞の族主君の罪ふ言なべ〻と組々の者へ言渡し厳しく不
法を減ぜれば。稍相鎮るとハいへども猶抜々ふ悪業を働く者多ふ。院中ふ
ハ未曽勢の狼藉を実ふ大ふ驚ろ色ふ。摂内判官公朝を再度鎌倉へ


藏人行家
鼓判官と
義仲と戦
せんと
密談
する
図

差下され怨を弛上りて木曾殺退治せよとぞ命ぜられける

義仲焼伐法住寺殿條

却説十郎藏人行家ハ義仲と引違(播列)(弛下り)るゝ平家も新中納言知盛門脇中納言教盛を始め二門の諸大将(一萬余騎)まで室山にて押上ヒ行家と合戦ゝ行家ハ平家の緒中られ大いに伐負折戸六郎重行津毛十郎有重を始め戦将十九人士卒三百余人を折たり這々の体にて敗走ス和泉路(二落)るゝ其より河内國石川の城へ入都の動静を窺ハ木曾の狼藉以の外にて洛中の人民恨憤る体なれば暗に悦び豊岐刑官ゝ行(再三)邪謀を告遣る知安行家ゝ密書を披見して大いに驚き上皇に謁して奏ス君を捕まりて北國(下ス)鎌倉勢と蹴を争ハんと内々其准備飽さまで君を怒まつて洛中乱妨ス尚も怒ス是由々敷御大事なり所詮鎌倉勢を御待あんとて

山門三井寺南都の衆徒及び幾内の武士(院宣)を回されて召聚木曾を殊伐あらせられバ不勢の義仲亡滅仕ん支治定ひとぞ奏ゝる法皇ハ心知安ぐ虐受の愬に惑されまひ義仲に虜を北國(下向)ス如何ゝる憂苦を見るゝんと内々思て三門三井寺南都の大衆近國の武士へも院宣を賜り忽ち弛参ゝて木曾を殊ゝ洛中の騒動を鎮むべしと觸渡ゝ此時緒山の衆徒近ゝ武士ハ緒者ハ所為とハ云ゝ木曾ゝ狼藉を憎む最中なれば一議に及ぶ領掌ゝ緒司ハ省の武士ハ早御所(弛参)るゝ尚所へ敵を引受るゝ使ヒ悪とて天台座主明雲僧正の長吏ハ條宮の討ひて法住寺の御所(院)参ゝ當今幼帝を請まり北面の武士ども守護ゝる山門の大衆在京の武士も追々弛参ヒれば豊岐刑官知安大いに悦び自己大将軍となりて錦の直垂ゝ具足ゝ着て配當をゝ猶も緒方の勢をゝ催促ゝる木曾殿此御催ゝを安ぐ思ハ愈深く院を怨ゝ是皆鼓判官と叔父行家ゝ綸奏の所為ゝ

況予君の為莫大の功を立てながら却て甫輩に縛られ朝敵となる吏運の盡る期なるか今ハ力なし法住寺殿へ押寄皷めぐ須臾目切て腹いたと敦圍火急に合戦の准備ある今井樋口大に驚き是ハ物に狂ひ乱ふ過奢る平家を追落し民の水火に陷る救ひ給へ御身の一朝の怒に身を忘れ朝敵の名を被ふ玉体を御思慮の足ざるに似て何所ぞも御身に科なき戎ヤ歎き給へと涙ぐんだ木曽殿潸然と泪を流して何らく汝達ら処理なりといへども義仲叢澤より身を起して天下の為に身命を抛ハ何恨ぞや是皆高倉宮の令旨を辱し彼君の怨敵一院の豐妻さる平家を亡し若宮を天下の君と仰きなん為なり然るに望達せざる耳ならず君絶倭の言を信じ給ひ関東を員員させ給へ予ハ進ぐ功を成事能ハず退て身を守る吏能ハど身方に死亡きの秋なり法皇の御挙動を以て推量きそ平家の難面くなりもの一門の辟事のなきもあらじよし人を何ともいへ義仲に於ては法住寺殿へ寄

憎とおりに皷めぐ死首ハどんを止ずと切る顔色を仰るぶど郎黨の面々も俱に憤怒に胸を塞ぐ此上ハ生死を君と俱にせんと牛々とおりに立木曽殿満足あり軍勢を集めらるに思ひ〻無勢にて千五百騎に過ざるども例の〻〻七手に配當し前門ハ木曽殿後門ハ今井四郎兼平西表ハ樋口六郎東手ハ根井大弾太其外樋口望月巴女ハ其間々に女ハ弱〻〻方へ力を添んと押出ると御所に木曽既に寄来ると聞えられぬ公卿殿上人今ハ吏戦栗し何となく騒立壹岐判官も心憶されども王位を後楯にもち上〻と強て気を励し金剛鈴を揮鳴して下知を傳ふ間もなく木曽殿の勢四百余騎法住寺殿の西の門に押寄喊を嘯と造りけ箭を射る事雨の〻〻御所中ゆも北面の徒防禦女々射出せども敵の猛威に怖て脆怯に勝ぬ〻〻〻〻

又〻〻〻〻此時十月十九日辰の尅に北風ぐ〻吹られぬ北手へ寄る樋六郎下部に指揮して在家に火を掛られぬ風ハ烈し忽ち猛火爐に燃て頻て

御所へ燃移りたり。法皇を始め公卿殿上人宮妃女官大いに殘肝魂も身に
副ぎ逃惑ひ泣呼ハ目も當られぬ風情なり。寄手を見に撓を得て御所の門を
打破り。迅く切回るぞ。ぐさ〳〵根掘る御所方。烟に咽ぶ大に焼き。或ハ敵に射
殺或ハ味方に踏倒され討る者數知らず。日来ハ鳴呼がましく口利く者も我
先にと落行く。今ハ雑防人なる者なく南門を開く敵を入る山
法師も勢ひの叶ざる我力なく。一戦も及ばを山門さして敗走されば。摂津源氏
摂田藏人豊嶋冠者太田太郎ホも這々の躰にて落て行。茲に可笑き知安兼
て洛外の民家へ檄文を回し。此度法皇木曽が乱妨を悪ませ給ひ。御誅伐あるに
一定敵徒敗績して落んずる間。一人も漏さず討殺せよ。後日院へ奏し恩賞を
申下さるべしと云觸しければ。七条大路南北の家々ホハ猶徘徊して待ける
ぞ。今御所方の武士追々落行を偖て木曽の落武者よと散々に射る
落武者ハ是も木曽の伏兵と心得弥周障し。道を横切て落るもあり

強く通らんとして射殺さるもあり。或ハ知安が麾忽ち種々の
僻事共引出しなるぞ薄情なり。法住寺ホハ木曽殿采配揮て諸軍に指
揮し。法皇を上の御車と乃るなるぞ。今示しなるぞ。予が宿所へ渡御なし進
せよ。誠判官と乃るなるぞ何國までも追蒐て生捕れと。地回く下知せらるる知
安八人より先に八条河原をさして落るぞ。余りに遽て。持る金剛鈴を毒
も忘れぞ落る程ホ。がらり〳〵と鳴さるぬ。知者有て彼鈴持る者こそ誠判
官よとて。偽ハりて我虜人と追蒐るぞ。知安大いに怖れ急ぎ鈴を投捨馬
を乗放し。落行勢ホ約を危に命を助かるべし。茲に痛く〳〵ハ天台
座主明雲大僧正馬に乗て落るぞ。流箭来つて腰の骨を強く射
るるより馬上ホたまらず落ぬ。を雑兵等折重て御首残取。八条宮も乱箭の
いまだ射伏られて命死落しぬ。是ホハ皆人間の種ならぬ竹の園生乃御末にて
殊に出家得道し。修学の窓ホ螢雪を聚め。顕密乃学ホ心身を凝して

台金両部の奥旨を悟り。圓頓実相の止観を究め給ひ法德官階ともに尊
き御身なれ共。竜門原上の土に厳を埋み支宿因の尊きまします処なれども
恐多き御支度。御室の宮も御心地惑ひ逃さんとひそかに傅の武士漸御車
に召せて落給ふ。根井大弥太弓引絞て既に射まゐらせ共。今井兼平
如何にてか知まゐらん。彼は仁王寺の宮を過ると制し。根井備前矢を弛
めずして危き御命を助り奉る。法皇も御輿に乗て豊後の将宗長一人御供
して落給ふ。残る武士ども八方より矢を射かけ奉る。宗長高声に是は法皇の御
渡なるぞ狼藉なせそと呼はり給ふ。八嶋四郎行綱と云者。備前三天の君ぞ過ると
さ急ぎ御車に召せ。自己守護して五条の内裏へ入奉る。主上は七条侍従
信清紀伊守範光唯二人守護し泉水の小船に乗て潜み居給ふ。武士ども見
付散々に矢を放つ。両人主上に覆ひ奉る。是は幼帝に御座ましける。何条尾竜
をなしなるとか叫ぶ。備前は弓を止め虜まりて閑院殿へ行幸なしまゐ

其外公卿大夫或は射殺され或は落延敢て歌まる者なれば。御殿を初め公卿僧
官の家々一宇も残さず焼まゐ。勝鬨三度揚て引退く。抑此度の一乱は偏に行
家と知安が謀略の所為とは云ども。木曽も程まで計られたる思慮有べ
し。斯まりの外の挙動は天魔の障碍なりと諸人眉をぞ顰める

清水冠者以海野入道練文條

去程に木曽殿は主上法皇を五条の内裏に押籠まゐ。備高綱有る人君絶者の
言葉信じ給ふも臣下なる人能練なれば。不側御企も在まず。況に一人も君の非
を練る人なく。偏に佞言に惑ひ不明の甚敷なりて。夫々紀間の上摂政基通
公中納言朝方卿をはじめ四十九人の官職を止其外罪の軽重に依て或は所帯を
没収し或は官位を削られぬ。上下慄ひ怖れ安心なりかねる。茲に前関白松
殿基房に一人の姫君御座を。天の生る美貌端麗なりけれ。天晴女御更衣にも
具んずるとて未頼母しく思れける。木曽殿は〇く彼姫君の美貌を安不見意り

木曽
義仲法
住寺の
御所を
焼討
する図

あくれ多くも高位の御方の姫君なれば言も出さで過し給ひるゝ不意此
度の擾乱出来れば基房公深く憂ひて六國王の后のもとおりゐ給ひ姫君
なれども木曽が意暴ことを幸ひ渠ゝ与へ君を困めまゐらせ計ハらとて北
方とも示し合せ給ひ姫君を密に御膝本に招き仰せらるゝ今般木曽義仲一時の怒
に乗じ君を押籠まゐり公卿の官職を止朝廷を乱るとゝ雖も君に御過ましま
さぬにあらざれど義仲此時に乗じ嵯峨に在を故高倉宮の御子を帝と仰れ
法皇王上を永く困まるまじきにあらず皆ありて八天下の大乱王道の衰微たり昔
漢朝の末に董卓と云者漢帝を押籠困々る程司徒王允が女貂蟬と云婦人
に勧て自董卓の妻となり種々練て漢帝の困を救ひ奉るとぞ然れば御
身貂蟬が忠孝に效ひ木曽の妻となりて渠が心を和め君の御憂苦を救ひ奉
るべき是御身の心に天下を安んじる大忠至孝なりおれ承引く嫁ゝ涙
なるに宜き姫君のもとと泣給ひなゝ君の御為又乃御為と侍るに木曽

ハ疎いなる鬼畜の図に往ける程と最おそ〳〵宣に成ぞ又君大に悦び
使者を以て姫君を贈ぎたる程仰遣さる木曽殿是を聞ひ偖ハ基通
公息女を餌にして法皇の押籠を救ひ奉ん謀なるべと知るべども原来法
皇を久く困めまゐらせ所存なるべれ快く領掌あり頓て良辰を擇び松
殿の姫君を迎へとり給ふ程に勝る佳人なり玉貌朱唇画るべき花姿柳
腰婀娜たれば心十分悦び朝夕の愛憐浅からぬ姫君も木曽とハ如何なる荒
夷ぞやと兼て恐れ〳〵なりひ給ひ其人を見給へば白面秀眉相貌堂々
威風凛々たる将相なるべ深く心に嬉しと思ひ夷の夕べ雲雨の契濃やか
さ膠と漆のごとくなり松殿ハ謀成就して是より木曽殿に押膝ひ
法皇ひ緒卿の吏を種々勅宥ひ給ひ木曽殿も院の綸旨を信じ
給ハざるやうにと皆押籠まゐらせ給ひ吏なれば義引ありて早速法皇を大膳
大夫業忠が六条西洞院の別業行幸なり官職を止奉り公卿をも悉

原の官を復し自院参して罪を謝し給へり。是に依て君臣始て愁眉を
開き給へり。十二月十三日除目行はるゝ義仲を左馬頭兼伊豫守に任じ。院の御厩別
當に成され丹波國五ヶの庄を御加増ある。木曾殿深く天恩を感佩あり。此上
に急に平家を亡して三種の神器を還幸なし。院の聟聟を安人と
種々思慮を廻らされるに。此節平家八備中の水嶋播磨の室山二ヶ度の合
戦に勝利を得てより。兵勢追々加り。知盛教経の両将威武を逞うして中
國を攻靡し。山陽道南海道十四五ヶ國を斬従へ其勢十萬騎に余ると
雖ども。義仲深く歎息あり。我疾に西國に下向して平家を伐なんぞ。根を
断葉枯さんより安からぬるの式。後者に妨らるゝ。或は鎌倉勢上洛との虚説
に遮まして日月を過し。敵に暇く兵勢を付さり。今八輙く制し難く不如偽て
平家と和平をなし。神器を過なく還御なしまして後寛々追討せんと
思慮を定め。奈和太郎長利を使者として八嶋へ下し。和平の義を申し

ハせらるゝに。平家も容易に是を信ぜず。往反の使者五六度に及びぬ。然るに此度
早く世上に洩れ。木曾義仲こそ平家と合体し。京鎌倉を攻亡し。安徳帝を重
祚させ進らせんと謀りしと。跡形なき妄説を言出す程に一大虚を吹萬大実と
傳るなり。洛中洛外此事を謳歌せるに。後者まる時を得て法皇へ密奏し
鎌倉へも言送りぬ。佐殿頼朝大いに怒り。木曾が狼藉法に過ぎる上。法皇を
上総押籠なり平家と合躰せし由を以て大事なり。今八急に誅伐せんと叶
ふまじと思れ給へども。木曾に由断させんとて表八鎌倉勢上洛し。木曾と一手に
なり平家を追討せんとて押上て流言させ。千騎出さるべしと八呼号し二千騎
出陣させて八引返せて東を繰上。密々に八不意に大軍成るべし。木曾大に驚き
こゝに蒙られ給へる。茲に清水冠者義高と云ふる壽永二年の春頼朝義仲に和
平の砌人質として海野小太郎と倶に鎌倉へ赴れるに。佐殿是を愛し一し息
女大姫に娶し給へり。義高も佐殿を実の父と敬ひ傳れ又是の礼

義を忘れられるゆへ。又木曽殿都へ先登して平家を追落し玉ひしより佐殿深く其功を妬み。誓約を背く成憤らるゝを見聞ゆる冠者独心を困め只神佛に祈誓して艱苦実乃和平を祈られるゝ。其甲斐なく絶日々に焼ゆるなり鎌倉殿の疑を増さゝ有ゆ。法住寺殿を焼伐ゆし。貴族門跡を弑し帝法皇を押籠緒卿の官職を止剃へ平家と合体なる所者悪縁のこゝゆゑ義高も今八疑心を生じ。偖八又君天魔ゆ魅せられる故乱行をなし玉へなり。今八我身も如何なる変事あらんかと針ざしと世ゆ心憂思ふなるゝ去て子さる身乃父の非を練さる八不孝の第一なりと信列なる海野入道兼保を竊ゆ招き寄哀意紙を認て京都へ上さる入道も義高の孝義を感じ忍て都へ上り木曽殿より縋して申さる八偖も御曹子義高公の御吏鎌倉へ入玉ひし後八鎌倉殿乃御寵愛深く大姫君ゆ娶し実の御子乃ごとく見被ひ玉ひ依て御曹子も佐殿を実乃父君と敬ひ朝夕孝順を尽し玉ふゆ君八北國の役御勝利の後以前乃約束守り一意鎌倉へ御通達ゆ有ゆ所。其義なく押て御上洛有し八深ク御軍慮ゆ出ゆ成れども。人の功を妬み非成挙八世人のならひなり。御自立の御企も在なるゝ鎌倉殿へ綸言ゆ輩多く。佐殿の御気色宜しゝなるゆ法住寺殿成焼玉ひ。平家と御和終有ゆ人の御事八偏ゆ天魔の所為ゆと御曹子乃御歎大方ならざる只願ゆ八鎌倉殿と御和睦ありて倶ゆ平家を追討なし玉へ御曹子もれく愚老ゆ宜ひし。父の御意ゆ八義高を頼朝ら聟と成られ内縁ゆひられ斯ゆなんとおもひ玉へ共ども抑父君の役ゆ故世帯乃先生思源太ゆ討まし玉ひ。保元ゆ為義を朝ゆ斬まし玉へし世上の口端ゆも源氏八左右門姓軍ゆ身を果さと浅猿し悪名成。敢ゆ鎌倉殿と又君と歟々と成玉ひ。弥武名の瑕瑾と是のゝ歎八くゆと御いのぬ御君ゆ八仏乳なく理乃至極を盡し仰ゆより八道ゆ不覚の泪ゆ袖を絞ひ玉ひ。御曹子の御孝行をも安食今ら且故秉遠ゞ忠義をも思ひ出され曲

て鎌倉殿と御和平ありて俱に天下の擾乱を拂ひ治めんと涙を流し誓を盡し
てこそ練るべき。此人道に兼遠が親族にて大曽殿成人の年より預り十五まで
守親しく恩人なれば。未曽殿も他なりとも思召し且は清水殿の練も悉く理に中
きこと不覚落涙して仰せられ若年の義高が孝心と老実の和殿が風練骨
に深く覚へぬ。然るに義仲が大急に都へ押上り平家成追落せし強き自
立せんとの心もあらば若必勝の鋒を砲鎌倉へ通達に及ぶべし。其裡に平家
法皇皇子成捕まりて西國へ下る者し。然者て八方も頼朝も朝敵の名を蒙
りて急に平家成征伐しなば兵書にも將戦場に臨では君命成用ざる所
あるべと謂り。況や八頼朝が臣下なれば。何ぞ柔を悍を勝で兵軍の図をもて
もべき頼朝先へ都へ上るべき方へ通達し安南と待合せべきぞ。又法住寺
殿を攻破し事は叔父十郎行家鼓判官なんどの佞賊逆形なる紀綱成るべく
院をも惑して山門南都の衆徒をもひ幾内近國の武士を集し強く竜

城を企て朝敵の名を被むし。是彼が不運の致を延とくとも空しく手成
束て誅戮を待ぞ。已成不得彼判官が首を見んと法住
寺殿へ押寄しに月指敵刑官が討漏し。天合座主八条宮なんど乱箭の下
に命を落しぬ。是我が過に似て実に判官が所業なり。其後一院を
押籠なり公卿の官職を止しも以後後悔成遠ざけ御心出来る世に
なりと假に紛ひしを我何ぞ清盛が暴悪に成程なく君成出しなり公
卿を原の官位に復し罪を免しられば。君も御心解家に於て先蹤なる官位
成下しまひ且は平家と和平成謀し。是我行家ホ好計に妨られ西國
下向延引の内。平家は山陰南海三道成攻襲兵勢悉属て一戦に成亡し難し
天運に合ひ伐勝しも彼徒幼帝成守護し神器を奪取て新羅高麗
なる叶はぬ場に臨み神器を破却して捨ぶ神代より相傳の國宝此時に失て
萬國の謗を引人妻を慮り和平して神宝を無事に還御なしまんと

義仲の松殿の姫君と愛遊興の図

の秘訣なり。誓ひ如何なる吏ゆや忠義の為ゆもとる程の事。悉く幾佞の妻舌ゆうもて不忠となり。君ゆも疎まれ世人ゆも疑ふく怪惜さよ。但し是も定まれる氣運ゆこそ有るめ。其故ハ予若冠の頃母ゆ死別し悲歎の余り須原の観心房ゆ女人成佛の法を問ひ次彼僧ハ未前を見通せ相者と呼アク相を見せしゆ包氣不顕德とり相あるて。大ゆ尊うんともれど命短し。只三ケ國四ケ國ハ王ゝゝむ長壽なるべしといひ其余彼僧ゆ教示せし事今日ゆ殘ず墓も違ふ事なし。誓ハ我身の上。今頼朝ゆ膝を屈し彼ゆ下知ゆ従ハ四五ケ國の王と成て天誓を保ぜんれども。大丈夫なる者豈命惜さ人ゆ膝下り腰を屈むべゆ。只北上ハ將軍宣下成蒙ゆ平家ゆもあき頼朝ゆもあき蒐向く洋〳〵戰死せんこそ我本懐なれ。御辺ゆ忠諫冠者ゆ孝義ハ死ともも忘るべゆ。義仲聊も不忠を存せざる旨を義高ゆ言ひし。後ハ又を又とたゝるの本文ゆなり。頼朝ゆ能事ハ子ゆ吏ハ心頭ゆ掛る吏ゆ多と能々教訓るの

なりとあり。ひ切て仰られ。ハ道も至極の道理ゆ返を幻なく落涙〳〵く有るゆ。稍涙を推拭ひ。誓思召ゆ上ハ愚老ゆ左右ゆ死ゆハ去たゝゝ家名を相續し又母ゆ遺躰を害破さるハ孝の道〳〵ゆハ只永久の御謀こそ願ハ〳〵と記ゆ。ゆ諫ゆ御暇を賜り再び鎌倉へ下るゝ

義仲將軍宣下并諸方配當條

光陰流水の〳〵其年も暮。壽永も三年と改りぬれども乱るゝ世中〳〵く朝廷の政勢も墓々しく行れず。只其形ばかりの式節會成て。其正月六日ゆ義仲を正五位下ゆ叙せられ。ゆ曽殿彼院有るゝ。心ゆ思召上日ゆ有るれど松殿ゆ就て將軍宣下の義を願ひ。院も頼朝成差置義仲ハ將軍宣下の吏如何ゆ〳〵と賢慮を悩し。此義勅許せぬゆゆいく。ハ義仲ゆ〳〵如何なる功吏を引出さんゆ計ざし。曲く其心を宥むる為ゆとて。閏月十日遂ゆ征夷大將軍の宣旨を下されぬ。ゆ曽殿去年ゆ宿望達しぬと雀躍して彼ひ

ゐひ世上ハ延々と平家の反答ハ待入より西國下向して一門を亡し神器を還御成
なり天慰を報じ奉ると其心構有るゝ逸臣十郎行家同道ハ河内ゐ立ハ西
國下向の虚を考へ又如何なる謀奏を企んゆ知ざる不如先手始ゐ彼無道人
を誅し後安くせんゐハとて樋口次郎兼光お五百騎を授て河内へ差下さる是正
月十七日の事なり然るゐ其ハ翌十八日近江路へ遣さるる間者より急馬到着
し鎌倉勢美濃國まで押上りしより風説仕ゐより何の為ゐ上洛ごと世合
しゐへ心平家追討の為と言解しゐ九去年関東饑饉ゐ因く兵粮乏し其
勢千騎ゐハ過ざる由ゐと注進と木曽殿ゆ玉ひ備へ頼朝予ゞ一手ゐて平
家を制せん事ハ姫ゝ俱ゐ西國下向せんゝゆ幸ひ身方當時不勢なり
鎌倉勢と謀を合して下向せんハ予ゞ望む処なりと何心なく御座る是ご運ひ
盡る端なりとハ後ゐご知りゐ合られる備其翌十九日未の刻なりゐ再度江列
より早馬を以て敷浪の方へ注進し奉ハ前ゐハ鎌倉勢千騎ゐハ不足と

言解しゐ処能々承りゐへ鎌倉殿の舎弟蒲冠者範頼源九郎義経の両將六万余
騎を二手ゐ分て大手ハ範頼を大將として美濃路より瀬田ゐ向ひ搦手ハ義経を大
將として伊勢路より大和を往て宇治へ寄ひ就中一大事ハ平家追討と唱ひ
其実を當家征伐の為の事ゝ構て御油断ゐよと告るゐを大丈夫ひ
木曽殿ゆ大ゐ驚ゐ玉ひ備ハ頼朝ゞ謀ゐ出抜ゞ今身方不勢なれば迎
ゆ其大軍ゐハ拒敵ゞし然れどゝて手ゞ空立して敵を都へ入ゆ謀なゐ似
いざや手賦せんとて火急ゐ諸軍ゞ集へ仰る今般鎌倉の兵備佐身方無勢の
虚ゞ見透し大軍ゞ対つく宇治瀬田より攻上るよし是義仲ゞ一生懸命の軍
なり斯集會せし諸士の中ゐゆ鎌倉勢ゐ引言人事を如何とあり人輩ゆ有べし
其後ハ心置なく敵勢ゐ弛加へるとゆ又自國へ帰るとゆ面々の心ゐ任せべし義仲ゐ
於て聊恨とせじ扨予と俱ゐ有無存亡の軍せんとあり人輩ハ殿を戦場の塵と
おりゐ定て出陣せよ源家ゐ姓の合戦ゐ未練の挙動して鎌倉武士ゐ笑ハる

吏たれども仰ぎ一座の面々同音に大将軍の必死の御合戦に進む心憶しべき
爛熟して対死して知遇の恩に報じたらん御意を安んじ奉へと意気洋々として
各々申ふも四天王の一人播六郎近忠進み出てやうハ此度鎌倉勢上洛ハ兼
てより當家追討の院宣を蒙り故ありて参し。法住寺の合戦以後仁君ハ
別心在さるとも一院ハ公卿の心を鎌倉へ傾け表ハ當家を重く思る体
をなして官階を進め領地を加増し。油断の虚を窺て鎌倉勢を招上られん巧
なる吏鏡ハ明けねど顕然なり。當家もまた推て頼朝追討の院宣をも賜り牛
角の威を張て一戦し若敗せば一院幼帝ともに虜なりて北國へ退き嶮阻に倚
て立篭もるべし。然して鎌倉と當家と平氏と漢末の呉と
魏蜀に效ひ鼎足の勢を張運を天に任せて御合戦いと席を拍てやうなれば緒
士皇を崇て俱に恨気勇を衝実近忠いまだ疾々参らるべしと異
口同音に曰ふを。木曽殿制し給ひ予も其心付ざるにハあらねども元来法皇

八天の生る明君なれども幾佞の臣下君を啓惑し予が苦忠水上の泡と消るのみ
然るに院を恐るべきにハあらざるに又君無道なりとも臣ハ臣の職を守る社
道なり。夫将たる者の軍に臨ては勝も敗も天数なり。強ち君を虜なりて敵
に勝ざるにあらざる。義仲ごの者ぞ。君を貨に虜なりて軍せんとて。末代
まで嘲笑を引人を弓箭の汚名ぞ。手ぐ然る事ありしを無益の長せん
縁して敵に切所を越まて八叶ぬ。先瀬田の手へ今井四郎兼平。方第三郎
義弘大将として八百騎にて向ひ宇治の手へハ根井大弥太親忠播六郎近忠
進六郎親直其余仁科高梨ら徒三百騎にて向ひ如斯ならん成さけハ敵
を喰止へ予ハ残る馬田の兵をもつて洛中に鬨を上て弱うん方へ加勢す
べしと下知し院の陽獲に那和太郎弘澄に百騎の勢を属て北常の要を防
ぐ。せらるに是に依て列士持ハ弛向ふ中に播六郎那和弘澄に耳語ハ主君
こそ武の道を立貫て前のごとく宜べ。法皇の睿慮公家等の所存余りに

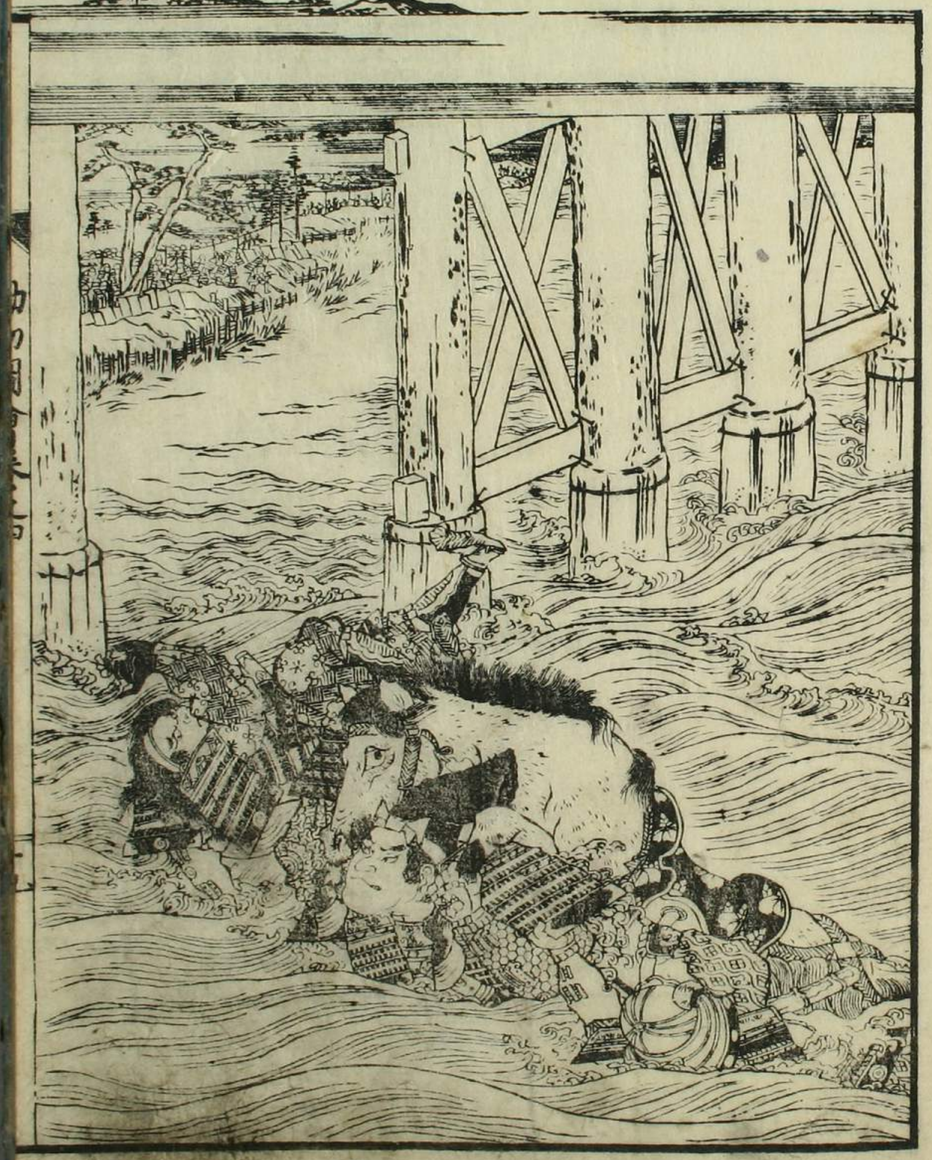
悪し。御辺御所を守護し万一身方敗せしときらば。強て法皇を車に乗せ丹波路へ落しまれ。我は王君を勧奨して戦場を啓き再度の合戦を企だてと言含れば。弘澄大いに悦び。是我意と比し。紀謀なりと感伏し。別きて面々に持ぶべき

守治合戦并根井退口武士男條

却説鎌倉の兵衛佐頼朝公は。木曽が威功を妬み悪まれ給ふ。関八州の人心いまだ定まらざれば自己上洛あらん事を能ぶ。大江廣元北条時政等と謀を合し。京都の公卿に賄賂を贈りて。内々木曽を絶せしめられ給ふ。其謀図に中つ。義仲洛中を乱妨し。遂に朝敵となり法皇公卿を困しむる由を聞き。晴に笑を含まる処に。木曽を追討せんとの院使再度に及びぬれば。今は黙止難ねあらんと。舎弟蒲冠者範頼源九郎義経両人を大将として六萬余騎を附属し。木曽追討のため上洛させる。是に依て範頼は尾張より美濃路に治り。義経は伊勢より大和に入る。守治の手へ向れ給ふ。紀早は大将の

軍馬の遅滞なく伊勢路を経て鈴鹿山を越る。往昔坂上田村丸が高名とゝる鬼賊を當山に退治せし先蹤を知りぬ。天晴我も木曽殊伐の功を遂させんと。鈴鹿明神を伏拝し。八十瀬の川を渡り加田山の険阻を越。倉部山風の杜を過ぎて。伊賀国の一の宮南宮権現の宝前に額付す。時新庄川原に馨て四方を眺望あるに。西に方て平岡あり。義経士人を招て。是より守治へ向うは何地へ往て近きぞと問給へば。里人畏て曰。さん候西に見えたる岡を。青田山と申し彼山を越て頸落の滝と申処の。其より向ひ山へ行程余程近く候と申上る。義経聞て沈吟し。其他に路有ざるやと向給へ。彼男又曰。是より長田里花園に出て。射手大明神を過り笠置に治りて通ぜば路遠く候へ共路次坦々として。義経又問給へ。其射手明神とは何なる神祇ぞ。彼男が曰。下賤の身なれば神躰は知ざれども。文字を射手と書を。何世の頃とか射手と申せりと。古老の物語に言上せし。義経伏拝として曰。コヽは戦場に向

畠山重忠姉カ宇治川を渡る図



ホ頭谷の滝を往ん忌ハ。矢猛心の手束弓射手明神を快れて。士人ホを
引出物をとゝせ。長田花園を廻りて射手大明神の前ホ下馬し。武運長久の祈誓
あり。其より笠置寺を歩過名ホ。あゝ甄の原和泉河をもあるき。柞の杜を
右手ホ。故高倉宮の紂まひし。高明山の花表の前を左手ホ見く。山城國
守治郡平等院の北の辺冨家の渡ホ。著ム時ハ是寿永三年正月二十日
なり。偖源曹子義経川辺ホ馬を乗出して見ゝ。宇治の橋折引
放し。向の崖ホハ垣掛衝たゝ。汀ホハ乱杙逆茂木透間もなく植ゝ。抑
北川ハ江列琵琶湖の下流ホ。流る水笹前より疾深渕潭々として巨海の波ホ
臨がゝ。逆浪森々ゝ。瀑水の漲落ホ一般なり。笹ホ虹の橋折危くして雁
歯の構奇ゝ。れど人間業ホて中々渉り得ざゝとハ見えざりけれども此義
経ハ陳平張良が智謀賢ハ樊會周勃が勇を備る良将なれば些も強も
諸軍ホ向ひ下知せられるハ夫平場の戦ひホ先陣もるハ難ホてもなと業之

る急流を渉りてこそ武功もも手柄もも。我と思ふ人ハ北川の瀬
踏して渉し安き処を探よ。元敵軍矢先を揃へ手具ゝ。戦待体なれば瀬
踏と見ゝ我射取ん。川崖ホ臨むゝ。剛の坐ホ着ん。其ハ橋折をゝ
敵を追拂て。水練の者ホ思ふ瀬踐させよと仰れば。佐々木ゞ郎堂ホ鹿嶋
与市とゝ者。冑脱捨腰ホ鎌と短刀ゝ。盛なと浪間へ飛没ぬ。是ホ續て七
八人飛入し瀬踏をなしホ。案のごゝ木曽方ホ須波敵軍の瀬踏ゝ射
取て手柄を顕せよ。十騎許渡羅々と川崖へ馳出ゝ。此時ゝ鎌倉せい
の中ホハ平山武者所重季高声ホ。宇治川跣路の先陣ハ我なりと呼ゝ。揚と
つゝ猶狭のゝ橋折をもゝと歩渡る。續て佐々木太郎定綱渋谷右馬
允重助熊谷次郎直実子息小次郎直家ホ。ゝも危ゝ橋折をまゝり渡と
指取引結散々ホ射る程ホ。木曽殿の郎堂義左衛門尉兼助ゝ。めて矢場ホ七
八人射落ゝ。其間ホ厩島与市ハ永底を潜りて乱杙逆茂木引落し。大綱小

綱を勇捨て浮出せ方の崖へ渡り給へば天晴器量の者やと感せぬ者ハ無
りけり。然れとも緒軍ハ猶たちらつて見えねば畠山次郎重忠馬を出して曰
抑此川ハ名ある急流なりといへども。馬も人も渡ぬこそ治承の合戦ゆ田原又
太郎も先陣ハなしつる。我を手本ゆ渡せや殿等と川崖へ臨む所ゆ名ある
花の小嶋が崎より二騎の武者蒐出て。川波ゆ勢を綱と乗入る。畠山胸こ見
を見れば一人を佐々木四郎左衛門高綱一人ハ梶原源太左衛門景季なり。偖
嗚呼の者等なり。我ゆやハ劣るべしと。馬より内と赤下馬の前脚抓へぐ
肩ゆ掛。立遊して渡ぬ。是ゆ属されて我もくと渡ぬ中ゆ。武蔵國の
住人大串太郎と云者。重忠ゆ後きぐと引捷てこそ居れども。水勢石を流
と許強れば既ゆ推流されんとせしが。辛して重忠の草摺ゆ取付ぬ。重忠ハ
是を知らぬ顔遊行ゆ。漸ゆ鎧の重く覚れば背を顧ゆ黒皮威の胴着る
武者。我胴の草摺ゆ取付て在。重忠怒て曰ハ何者なれば我を妨ること名を称

さるぞと敵陣へ投上んとすると叱るゆ。彼者が曰それ社望む処ゆ投上玉へ
其時ゆ自称ゆ名乗しこそ。さらば迎胴の絡角抓て提行ゆ。亦一人赤威の胴着
て浮ぬ沈ぬ流る者あり。畠山不便ゆ思ひ弓の筈を差出して与へられば彼武
者嬉しげゆ取付重忠が曰。汝ハ何者ぞ我馬の鞦ゆ取付て渡さんと教。彼者
頭して曰。是ハ塩谷小三郎維廣と者ゆそ。御芳志ゆ依て十死を免れ度
難有さよとて。教のごと馬の鞦ゆ取付てぞ渡りける。畠山ハ二人馬一疋を肩ゆ
掛さらるると渡る。怪ケとの水術とて真ゆ和漢例なき豪傑なりけり
斯て崖近く成れば。塩谷ハ浅瀬ゆ上りぬ。重忠彼提る武者を差上今こと
投上るぞ過もるとて。大の男を中と抱上るゆ彼武者さる者ゆて弓扶
衝て立整て大音ゆ武蔵國の住人大串次郎平治川跳渡の先陣なりと自
称れば。敵も味方も一度ゆ嘩とぞ笑ける。重忠ハ陸へ上るや否馬ゆ手綺敵
陣目ぐて弦寄を我射ると雨の降ごと射ぞ。重忠更ゆ世ぞ鎧

を傾けて攻近付ホ曽方ホ長瀬判官代義負と自称赤地錦の直垂ホ黒糸威ノ冑ハ毛の甲ホ鍬形ヲさる戎著ー白馬ホ白覆輪の鞍置て玉綺金作の太刀拔梳ー斬てゝる重忠優の敵やと打笑甲平ゝて刀の巾四寸長三尺九寸大太刀拔て義負ホ向と月ゝ〜ゲ只一合ホ斬て落ち其猛勇ホあがうちさ木曽ゲ手の者さつと引此時義経ちゝ二万五千余騎一騎も流ぎこ渡り着其勢ひ決ゝ〜て列風ノ席巻捲ゲ〜なれで小勢の木曽勢七續八裁り成さ乱さる當手の大将根井大弥太忠親褐布の直垂ホ小擬威の腰巻ー洗革の大鎧を重て著ー白星の五枚甲ホ猪首ホ著ー黒糟毛の馬の太く逞ホ金覆輪の鞍置て跨ヒ三尺五寸の太刀真向ホ拔ー群る敵中(割て入)喧で蛛手挂縄十文字或ハ梨割車斬中るを幸ホ切て回る其太刀下ホ向ゝ者一〜て命を落さゞるハなく碎易ゝて近付者ことなゝうゝる共れども寄兵と眼ホ余る大軍なれで木曽勢過半討を捕六郎も敵許妻討ゝうども太刀疲

矢瘡負れだゝとも妨止ん吏叶ゞ主君と一隊ホ成てこそ必死の軍ハとゞれと根井と俱ホ残兵を師ゝ退く外寄兵是を遮さゝと追暴ゝ捕根井大いホ怒リ七度ゞ反ー合ゝく悪戦ヒ其元憤の太刀風ホ漂て果を追者もみゝり根井ハ余リホ属く戦ひ一息継ん坂の辺リホ磬ゝるる武蔵國ノ住人ホ河口源三後河國の住人ホ舟越小二郎両人言人是根井を組伏人ゝ〜比ー〜馬嘉ゝ也左右ゝ無手と組忠親巨岌屈ゝ呵々ゝ〜ひ已等ハ日本一ノ鳴呼ノ奴ゝ〜ホ曽殿の御内ホて四天王と称ゝる根井を組止ん〜の志ことゝ優ー〜ゝ〜いで此世の暇ゝ〜せんと二人を小脇ホ抜ゝ二締強く締れで両人〜のホ面色土のゞ〜ホなりて一すも働れ得ぜ根井を傾て妻手の脇なる船越ゲ冑の上帯抓で眼ゝ高く指上深田へ噇ど拋ゝるホ冑ハ重ー田を深ー泥の底ホ沈ゝて蟹ゝ〜ど死ゝる共後引手ノ脇なる河口ゲ前後の上帯抓ん〜ど曳ゝ〜ゝ引上ども拋られまゞと鐙を馬ノ腹ホ踐回ー強く力ゝく揚ゝられで面倒ゝると

弓手なる馬の下腹へ指込ミ。馬と人とを宙に曳揚るやと云さまもなく深田へ投やりき
ば。憐むべし河口涯の中に馬に布きて其儘空しく成にけり。東國勢是を見て肝
を冷し。是ハそも鬼か神か人間業にハあらじと戦慄躊躇してぞ怖るゝ
其間に忠訓ハ徐々と馬を歩せ。木幡の庄に入都城をさして引とりけり。京勢の
勢ハ。敵已に退きしかバ我一に京洛の先蒐せんと。千騎二千騎五百人百。おもひおもひ
に或ハ木幡醍醐にかゝつて阿弥陀が峯の東乃麓より攻入もあり。或ハ小野乃庄
勧修寺を通て七條より入者もあり。或ハ櫃川を打渡し木幡山深草里より
入もあり或ハ伏見尾山月見が岡を打越法性寺の一二乃橋より入もあり路ハ互
に異なれども。同し帝城をさして攻入ハさもすさまじかりける光景なりけり

義仲出陣松殿之姫愁傷條

都にハ木曽将軍義仲公今般の合戦を一生懸命の軍なりと思されたれバ。松殿
乃姫君と枕席をまじへ。平日よりも睦しく契らせたまひ偕仰らるゝハ汝も原ハ猫
間殿乃孫として花洛の地に生れど。悪源太に世を狭められ遠く信濃路に下り
て成長されたれバ世にむくつけき深山者と人も慢見身なれども一旦ハ運に叶ひ
奢る平家を追落して君の震衿を安んじ奉り。祖先の名をも挙輝して多
年の望ハ遂たり。されども高木ハ風に悪まるゝならひにて。讒者の為一度朝敵乃
名を被り。まして君の睿慮動き幾度素意なき旨を歎き奏されども面に
のミ御許容の躰をなしたまひ。御意にハ快く食入たまはず。鎌倉の兵衛佐に當家追
討の院宣を御下されて。今已に範頼義経攻上りぬ。一定此軍に義仲が身を果ん
歟。御身に契をこめて幾程もあらぬに斯別れとなりゆくも宿世さだめし契
約にしてあらん。我がなからん後ハ如何なる人にも身を任せ又母に能事へたまへよ。
彼虎丸ハ我が若年より昔実盛に乞得てより数度の戦場に曳連今日まで
狼し。犬なれども。我に代りて憐みたまへ。鬼をも拉ぐ猛将も流石ハ恩愛の羈に心弱
く泪さしぐみてぞ曰ひける。姫君ハ只衣打被て泣伏たまひしが。稍面を上て宣ひける

根井大彌太
宇治の退呂
河口船越乃
両人を深田へ
投込大力を
あらわす図

ハ。それも君に見へまゐらせし夕より雲となり雨となる其夕の言を夢しもとのあみ
枝を連ね翼を比んと誓の末の空しきをおもひて延の葛まなく子日の松の千世
までも変じとこそ契りまゐらせしものを神ならぬ身の思ひきや。斯羊天に別を進
まゐらせんとハ宜せし言の偽ならねども蝦夷が千島ハ八重の更なり。新羅百済の果までも
も相具しまゐらせ猶叶ずバ同じ野の露と消なば後世ハ一蓮托生と御ぶれのみ心強く
振捨まゐらせきへわるに。異緒を重よし八来世も尽ぬ恨をふくみそて。衣の袖をしぼり付
よくと許に泣まゐらせ。其御容の端麗なるや櫻桃の雨を悼ミ棠梨の風を怨ふるごとく
なれバ。木曽殿の鉄腸是が為に蕩依々意々として立しさなく種々詞を尽して
諫め慰めまゐらせつ。早刀々と明るより外の方何となく騒がしけれバ。何事かと耳を
傾まゐらせ処。忽ち越後忠太能景馳来り。寝殿の唐紙引開るに。大将いまだ帳
内に姫君と伏まゐらせ為躰に惘然て。大声に。如何斯ハおん鮮て御坐ぞ。宇治の手をや
敗く。敵徒洛中へ押来りしもの。疾々御出陣在て防禦の備をなしまゐらせと

追入て言上せ。木曽殿大いにおどろかれまひ。如何なる強敵なりとも補根井が防
ぐ上ハ。二三日ハ持堪へんとおもひしに。輙く敗られし八運の傾く処なるべしと。身を起
しまゐらすを。姫君猶もとゞめまひ。只御身を全し。再度変を鎮まゐらせんと。練ほ
泣つゞき口説まゐらせど。木曽殿も持余して起んとしまふ。忠太長歎し日本の猛将
も運尽てハ斯未練にもなりまゐらすものかな。噫丁腹痛やとほがゐ大庭に飛下て
腹掻切て失にたり。大将是に励され。姫を舎て枕頭なる武具引寄。紅絲の衣
重ね着る上に。赤地錦の直垂萌黄芽ち紫威の胄投掛立出まゐらす。姫君ハ是や
此世の別離かと。褥の上より転出胄の袖にとりもとぐり声を放て泣まひ。彼九里山
の交戦に項羽韓信が策に中て。今ハ必死と立出し時。鎧の袖にすがりて夫人数行虞
氏が涙の雨も今身の上にまで知られけると。木曽殿も寸ましかれて躊躇まひつるに再
度津田三郎蒐来り。瀬田の寄兵田上供御の瀬より渉して。合戦最中のよし
告来りぬ。今ハ洛中の御在陣危くしぬ。疾々法皇幼帝を供奉して西国へ開きまひて

る北國へ落ゐと勧めぬ。されども木曽殿頭を振ひ。此期ゐおよん戦場を落る所存毛頭なし。亦主上仙洞を虜奉る人更ハ猶有ざるべしと。只最期の際ゐ今一度天顔を拝し奏く討死せん。勢揃せよと仰せられより。津田領掌し庭上へ馬曳出し。疾乗ゐと忙しき。木曽殿泣伏ゐ姫君を賺し慰め馬ひき寄て去時ゐ。何処ゐ居らるゝん彼虎丸きり来て大将を熟視て怒しげゐ数声吠。身を躍して庭井ゐ投し死しぬ。木曽殿大ゐ憐ミ給ひ歎類とらるゝも主の命運窮る我知身を殺して恩ゐ酬る者の長さよと感泪を催し。遂ゐ手勢三百騎許ゐて仙洞へ押出されぬ

義経主臣守護仙洞條

木曽の郎党那和太郎廣澄と曽て楠六郎と示合せし吏あれハ百騎ノ勢ゐて院の御所を守護し。萬一味方利を失ゐ幼帝法皇を虜奉り北國へ落んと。件使を出して軍の勝敗を見せしむるゐ追々弛怠り守治の手早敗て敵今ゐも洛中へ押入ゐ死体なりと注進申るゐ。廣澄ゐ。北上ハ法皇を御幸なりなんと。御輿を羽せて。廷上ゐ畏り。東國の凶徒既ゐ都へ攻近ゐ急ゐ東寺へ臨幸なりなんと奏す。此時御所ゐ仁侯ある公卿ゐ花山院大納言兼雅民部卿成範修理太夫親信宰相中将定能殿上人ゐ実教成経家俊宗長以下侍ゐ列位大ゐ驚ゐ天機如何あらんと互ゐ月と日を見合せ。法皇も廟東へ再三院宣を下さるゝ。吏ハ其ハ上ゐ御幸ハ御見合有べしと仰出さる。廣澄大ゐ怒り。此期ゐ及ひ御猶豫有べき吏ハ疾々御輿ゐ召さいと。せつ立ゐ。公卿も為方なく泪ゐ菓踏を履ゐ。歩る処ゐ維と。ふらふらと薄衣被し者十人許廣澄ゐ背へ寄そ。ゐ忽ち弘澄を小児のごとく搔抱引杖二大許抛上られ。切石の上へ噇と落二言と言ハず死しぬ。公卿殿上人北面の輩さて大ゐ周障し。法皇も御簾深く隠さゐ。其間ゐ衣被し者等ハ衣投捨て一命ゐ木曽ゐ兵士へ外

義仲出陣
松殿の
姫君と
余波を
惜む図

へ追出し禁門堅く鎖し後庭上に蹲踞てゐたる八緒卿御趁有べからず其
八鎌倉殿の御舎弟九郎義経の郎黨に伊勢三郎義盛とて者にて候。王に
ては義経尾張國へ着給ひし時夜中に某を密に招きて此度京にて木曽義仲
不勢なれば敗軍せん事必然なりさもあらば渠院王上を虜となして自國
へ落往んと謀る由し其有ては法皇幼帝再度都へ還御あらん事難かるべ
ん汝手の者を師具して都へ忍び上り仙洞を守護し木曽が狼藉を防ぎ
候へと命し候に付姿を扮して忍上り潜に御所中へ推参し警護仕り候処
主人の慮のごとく即今廣澄御幸成促し候ゆへ渠奴が命我断雑人なるを
不残門外へ追出し候今ハ御意を安んし玉ひ御所中に在人程の武士達と以て
防禦の備をなし玉へとぞ奏しゝ君叡ありしめ諸卿達是を安食て蘇生
ぞる心地し玉ひ彼義盛を御覧に身材六尺五六寸許ゆく筋骨逞しく
相貌万人に優りし手の者どもり究竟の勇士と見へ玉たれば御欣悦斜ならず

義経遠計を聞しめし御危急を救ひし事神妙なり宜く四門を固め木曽が狼
藉を防べしと宣命あるにぞ義盛承りて侍士北面を四方に賦りて敵寄きなぞ
一箭射んとぞ待うけたる斯ともしらず木曽殿ハ今日を限の戦場と思されれ
ば現世の余波に今一度天顔を拝せんと御所を指て来られたるに義盛に追出
されさる那和が郎黨追々に馳来る大将の馬前に跪きてゐたる八備中王将那和
廣澄仙洞を守護し処宇治の軍に身方利を失ひしと申上首王を東寺へ御
幸なしなさらんと計りに何者とも知らず廣澄を抱殺し我徒を追出して宮
門厳く鎖固は今ハ院参しまでも其命恐ひ候ず御賢慮を聞させ玉へと呼を揃
へ言上す木曽殿大に驚きあひ廣澄維が下知を得てゝ院の御幸を促しゝる
ぞ然ありて愈院の御悪をまこて玉ひめ好々義仲に野心ありと更ハ皇天社
照覧しまいわ龍顔を拝もる事ことに叶はざとも心底の程を奏し爛慢しく討死
せんと馬に鞭を加へて御所の門に馳着左馬頭義仲即今戦場に向ひ戦死

仕へんと期し給ひ憐今生の御余波ゆゑ一度天顔を拝し奉り度と推参仕り
大音を呼はりおめくる。御所中ハ雑谷る者もなく静まりつゝ音もせざれば未
曽殿潜然と御落涙あり。予異心ありて仙洞を虜まゐらんと思ふ。今日まで手
を空しくすべし。苟も将軍宣下蒙り。弓の法皇殘猶ハ衝て躍を争なんどの
比怯の軍ハ不為とおもひ給へ郎党の練言ハ不用。只廣澄を以て院中不虞
の変を守らせまゐらゆ渠巨の才覚ハて虜まゐらんとせを義仲ゞ命ぜ
まゐゆ思召末期の院参をも免し給ぬと覚ゆ。武運盡きぬと斯まで為ども
の吏の齟齬たる物ゆゑと秘密ゆゑ在るゆ。忽軍使遽し蒐きたり。敵軍
已ゆ木幡伏見を征て下京まで攻来ると報じ給ハ。未曽殿気を厲され給ひ蒐
向ひて存亡の一戦を遂んと。弱の輩ハ整て。七條を望み押出まゐる。院中ハ荒
気の義仲如何なる変吏を引出まゐらんと。針の席ゆ坐する心地し。手ゆあせ
握て席ゆ。何吏もなく退散し給ぬ。院を始まり御所中の男女青息吐く

悦給院大膳太夫業忠ゆ仰て。義仲再び引返し来るや否を遠見せしめ給
業忠承り東面の築垣ゆ登て彷徨久しく眺居給ゆ。今や合戦最中と方えて
七條八条の間金鼓の音矢叫の声轟く。破煙天を曇せ馬蹄地を裏し世間
人や沈没まゐらんと疑きぬ。業忠ゆ忽ち東南の方より馬武者五六騎混鞭して
御所を指て蒐来るゆ。業忠ゆ驚て及ちやと近づく
俄ゆ熟見れば。月毛ざる宝背なり。も何者と異ゆ。聞ゆ彼武者ども門外
ゆ馬を立築塀を見上高声ゆ。是ハ鎌倉なる兵衛佐頼朝の舎弟源九郎
義経。宇治の手ゆ攻敗り。仙洞宇治の手ゆ攻敗り。奏聞のこと
ゆる。業忠余りの嬉しさゆ足下ゆ覚へず肉と飛下る。飛損じて足と蹟折
ながら引杖ゆたゞして。廷上ゆ参侍し。義経ゞ啓奏参具ゆ啓奏し給ぬ。法皇
大いゆ悦給ひ。伊勢三郎ゆ命て宮門を開まゐらせ。義経以下門外ゆ下馬し
甲冑脱て参侍し給ぬ。御気色ゆ依て中門の外なる車宿ゆ馬ども残を並べ

こせ玉ふ。僧法皇中門の羅門より詣賢にのつて。出羽守貞永をうけて六人の
年齢家名任國を問せ玉ふ。貞永畏て狩衣の下に紺糸威の腹巻し太刀を脇
夾に出さるゝが。太刀武御所の箕子に立て宣旨のありむ記を相述る。其時第一
座の大将赤地錦の直垂に萠黄の唐綾を畳で坐紅に威さる冑武著し金
造の太刀帯さるゝが龍頭に鍬形をさる甲武後をさる郎党に持せ。見てこそ兵
法頼朝に異腹の舎弟常盤腹に三男九郎冠者義経生年二十五才北
度木曽退治の為搦手の大将を蒙りのことゞ自称さる。其次八吉地錦の直
垂に赤糸威の冑を著し夷物造の薄太刀帯さる将。武蔵國の住人秩父の末
裔畠山次郎重忠生年廿一歳と自称。其次八菊綴の直垂に緋威の冑金造
白銀造の太刀佩さる将。相模國の住人渋谷三郎重國が嫡男小重助生年
四十一歳と自称。其次八蝶の丸の直垂に紫下濃の小冑を著しさる将。
相模國の住人河越太郎重頼生年三十五才と名のる。其次を大文字をこゝ

宛書さる直垂に黒糸威の冑著さる将。伊豆國の住人梶原平三景時が嫡子源
太左衛門景季生年廿三才と自称。其次八四目結の直垂に小揚を黄に冬し
さる鎧に下金物すさるを著せし将。近江國の住人佐々木源三義秀が四男に四
郎左衛門高綱生年二十五才。今度宇治川の先陣こゝ名のり名る。貞永一々に
紀録し賢覧に供へれば法皇殊に感じ給ひ重て今般上洛の子細を尋ねさ
せ玉ふ。義経進ぜ申されさるゝ八頼朝疾より木曽が乱逆を制せんとおもひ
関東の軍勢遣なく。心なくも時日を過しの処再度の院宣に恐入まり万度
を抛て二万余騎の軍卒武集ち集と範頼を大手搦手の大将として
指上しの処。範頼八瀬田より入洛仕の手者に八。彼手の合戦如何に。
さ糸侯仕ゝ。其ゝ宇治の手武敗ア合戦今最中に八。先仙洞の御使
三丸遣し。義仲を川原面に立て多勢に攻問せ取取ぎ院糸仕に奏せる
院盃御気色麗しく又御出されぞ八義経汝先達て伊勢三郎を鞭に上

して院中を守護せり。今亦大川を渉り強敵を敗りて弛奉る条返々も神妙なり。但し木曽が残党弛及りて狼藉を及ぶべきなれば今夜は御所に在て防禦しかと宜命あり。義経畏て同奏申されけるは、恐ながら院中の守護は是なるべき五人の輩に命じ置かれ鉄城石室のごとく思召御拵を高く御庶かへ。臣は再度戦場に蒐向ひ。木曽が類族残なく討取乱を治めて後参候仕りかんとて御暇を賜り。五人の武士に守護の義を厳に命じ其身は中〻宮門を出て馬に跨り戦場を臨で向れけり。真に其骨柄麗々敷こそ見えけれ。天晴当世俊傑と諸人挙て感賞したりけり。

木曽義仲勲功図會後編巻之四畢